

第39回住総研シンポジウム概要

テーマ:「作られたものから作るものへ」ー主体形成としての住宅

第1回:住まいの主体性とはー「おや?」の契機としての事象 ※東日本大震災復興支援事業



木下勇氏



池田秀紀氏



小林崇氏

写真 Taisuke Yokoyama

2014年7月16日(水) 13:30~17:00 sonorium (東京都杉並区)

司会: 木下 勇 (千葉大学大学院教授/住総研研究運営委員会委員長)

講師: 池田秀紀 (暮らしかた冒険家)

小林 崇 (ツリーハウスクリエイター)

馬場未織 (建築ライター)

コメンテーター: 村田 真 (日経BP社建設局編集委員)

本年度の住総研シンポジウム第一回目は、東京杉並区にある音楽ホール「sonorium」(設計=青木淳氏)にて行われた。今年度のテーマ「住まいの主体性」は、戦後高度成長に伴って豊かになった一方で、高度消費社会に陥り、住まいや暮らしですら巨大な市場システムに埋没してしまったのではないかと問題提起によるものだ。そこでは「住む」という主体的な行動が失われてしまったのではないかと、それを西田幾多郎の言葉「作られたものから作るものへ」を引用してテーマを設定している。これからは、消費的社会的受動的な存在ではなく、暮らしや生活を主体とした生活を築くことを目標に、もう一度住むという根源に立ち返ること、その道筋の見直しを図りたいと研究運営委員会委員長の木下氏が主旨を述べた。

第一回目となる今回は、主体性の可能性を広げる3名のゲストを招いて行われた。池田秀紀氏は自らを「暮らしかた冒険家」と名乗り、夫婦二人の暮らしをアグレッシブに開拓する。小林崇氏は、「ツリーハウス」をつくり続ける中で、生きる事の根源を追求するような活動を展開。馬場未織氏は、東京都内と千葉房総との二地域居住を積極的に選択しながら、定住すること、都心と田舎の補完的な関係のあり方を探る。三者三様の実践者から、主体性の可能性と意味を考え直す。

◆報告1 池田秀紀(暮らしかた冒険家) 「家の中を、冒険」

池田秀紀氏は、結婚4年目の現在の暮らしぶりを紹介した。池田氏はWEBデザイナー、奥さんはカメラマンを仕事とし、二人三脚でウェブや広告制作を初め、坂本龍一氏とのインターネット実験を始め、アーティストとしても活動する。そんな池田夫婦の生活ぶりが、今メディアで大変注目されている。その

生活とは、自ら「暮らしかた冒険家」と名乗り、「高品質低空飛行」をキーワードに暮らしを形づくっていくというもの。二人の結婚式は、高尾山のキャンプ場で行い、列席者もテントを張って宿泊する「結婚キャンプ」だった。結婚後は熊本県のとある古民家に惚れ込み、改修を手がけて突如移住を開始させた。民家の改修はDIYならず、多くの協力者の手助けを借りながら作る「DIWO」(Do it With Others:池田氏造語)で甦らせた。熊本での生活は、地元の農家の「一生分の野菜」と、ウェブ制作を交換するなど「物技交換」で成立するという。お金がなくても豊かに暮らすことを「貧乏になる準備」と楽しむ池田氏は、「幸せの方法は沢山ある、まだ発見されていないだけ」という。その方法を見つけたご夫婦は、「お先に失礼します」と一言残し、プレゼンテーションを締めた。

◆報告2 小林崇(ツリーハウスクリエイター) 「木の上から広がる世界」

小林氏は、20年間でおおよそ100のツリーハウスを造ってきた世界でも希有なツリーハウスクリエイターである。俗世間から距離をおき、自然を相手に悠々とした生き様は、通勤列車勤務のサラリーマンにとっては羨望の的ではないだろうか。しかし小林氏は、小学生の頃から青春時代まで、義務教育や日本社会の中を窮屈に感じながらマイノリティで過ごした苦境の時代を振り返った。社会との接点をなるべく希薄にしながら30代中盤まで過ごし、その頃借りていたアパート外の木にツリーハウスをつくったのが、今の活動の始まりだったという。その名を「エスケープ」と名付けたという。「大きな自然のうねりに飲まれるような所でも木に登り、成長する木の上に

わざわざ成長しない人工物を取りつける。その矛盾との戦い」と自身の活動を分析する。また「人間の暮らしや環境が変わっていくのに、棲み家や家が変わっていかないのは理不尽」として、ツリーハウスだけではなく、車やテント、モバイルハウスなど、自然に身を置きながら暮らしを対応させていく可能性を少しずつ広めていきたいという。

◆報告3 馬場未織（建築ライター）

「週末は、田舎に暮らそう」

建築ライターの馬場氏は、5歳と小学校4年生、中学校2年生の三人の子どもをもつ母でもある。都心育ちの夫婦が、虫好きの長男（当時3歳）のために、私たちの代から「田舎」をつくろう、と移住を計画。2007年に千葉県南房総市の山間地域にある8700坪の農家を購入し、都内と往復の暮らしをはじめた。移住先は、7世帯のみ、一人を除いて全て60歳以上の限界集落で、子どもがいるのは馬場家のみだという。

この二地域居住は、育児をきっかけにした衝動的な行動ではなく、本人の生い立ちにも関わりがある。両親が建築関係の仕事に関わるなか、研ぎ澄まされた感性で埋め尽くされた生活を、窮屈にも感じていたという。自然と親しみ、新鮮な食べ物も享受する生活の中では、都内では考えられなかった豊さがある。移住後は、「NPO法人南房総リパブリック」という団体を立ち上げ、南房総の野菜を都内にもちこみ、日替わりオーナー制でランチを出すカフェの経営や、南房総で里山学校を開校する等、房総の良さを伝える活動を続けて、最終的には定住のための拠点をつくるという構想をもつ。都市のエネルギーと、田舎の豊かなコンテンツを繋げた相互補完的な関係を、一個人の暮らしから社会の未来に繋げて考えている。

◆ディスカッション

初めに、ゲストコメンテーターの村田氏が、三者の発表に対して総評した。その中

で「一人の主体性を主張するのではなく、周囲の人を巻き込んで関係をつくっている。これは主体性という言葉を考える上で非常に重要なことではないか」と指摘。また3人の言葉に出てきた「幸せ」（池田）、「幸福」（小林）、「豊かさ」（馬場）が、いずれも金銭的豊かさとは異なるものであること、これが資本主義に対して席卷する新自由主義との対立の様相を示し、それこそが今社会で行き詰まっているところを突破させるのではないかと重要な視点が抽出された。また、今日発言した3人だけではなく、社会の中の個人がそれぞれ「何か」と闘っているとして、主体性のある暮らしは、ある特権を与えられたもののみ成立するものではないことも加えた。

会場の意見を交える中で、世代間のジェネレーションギャップが浮き彫りになる場面もあった。経済や近代社会システムを否定して距離をとって闘う選択（小林氏）と、消費社会と非消費社会の間を行き来し、まさに主体的に選り取るハイブリッドな暮らしの選択（池田氏、馬場氏）。後者について木下氏は、現代社会における肯定的な闘争姿勢がよく表れていると述べ、これからの住まいを考えるにあたっては、若い世代の暮らしや住まい観を捉え直すことも必要性も議論された。

最後に住まいや暮らしの価値観について、「毎日三食、大好きな人達と美味しい食卓を囲んで、美味しいお酒が飲める、ただそれだけでいい」（池田氏）、「今日自分のいる状況を自分でちゃんと納得してもらえるかどうか。寝る時に今日は面白かったと思える何かがあるか、自分はハッピーだと感じるかどうか」（小林氏）、「遊び仕事で埋め尽くされた田舎の暮らしに幸せを感じる」（馬場氏）。こうした三者三様の言葉からも、「主体性」を考える上での多くのヒントが得られた。

文責：帳章子（建築思潮研究所）



馬場未織氏



村田真氏